

BIN KONNO
今野敏

宇宙海兵隊

4 ギガース

THE SCREENPLAY BY BIN KONNO



講談





講談社文庫

常州大学図書館
宇宙海兵隊
蔵ギガス章

今野 敏

講談社

|著者| 今野 敏 1955年北海道三笠市生まれ。上智大学在学中の1978年『怪物が街にやってくる』（現在、朝日文庫より刊行）で問題小説新人賞受賞。卒業後、レコード会社勤務を経て作家となる。2006年『隠蔽捜査』（新潮社）で吉川英治文学新人賞受賞。2008年『果敢 隠蔽捜査2』（新潮社）で山本周五郎賞、日本推理作家協会賞受賞。「空手道今野塾」を主宰し、空手、棒術を指導。

う ちゅうかい へい たい
宇宙海兵隊 ギガース 4

こん の びん
今野 敏

© Bin Konno 2011



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

2011年6月15日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社ブリプレス管理部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-276959-4

目次

宇宙海兵隊ギガース4

5

第六章 木星圏遠征

7

解説 笹川吉晴

254

巻末資料集

273

イラストギャラリー

280



講談社文庫

宇宙海兵隊

ギガース 4

今野 敏

講談社

前巻まで

22世紀、小惑星帯の彼方にまでその版図を拡げた人類は、史上初めての宇宙戦争に突入した。地球連合軍は「絶対人間主義」を標榜する指導者・ヒミカが率いる武装集団と、数多くの軌道で戦闘を繰り広げてきたが、遂に月への侵入を許してしまう。連合海軍最強の強襲母艦「アトランティス」と、新型機動兵器「ギガース」を操るリーナたち海兵隊と空軍の精鋭は、辛くも敵を退けるが、その中でオージェは敵の秘密の一端に触れる。そして地球では、ジンナイ議員を中心とした反戦派が、連合からの弾圧を受けながらも戦争終結に向けた運動を続けていた。

目次

宇宙海兵隊ギガース4

5

第六章 木星圏遠征

7

解説 笹川吉晴

254

巻末資料集

273

イラストギャラリー

280

宇宙海兵隊ギガース4

●主な登場人物（ギガース4）

エドワード・カーター 大尉。強襲母艦

「アトランティス」海兵隊第一小隊小隊長。

リーナ・シヨーン・ミズキ 少尉（情報部では少佐）。ギガース・ドライバー。

クリーゲル 准将。「アトランティス」艦長。

エリオット 「アトランティス」作戦司令。

オージェ・ナザーロフ 大尉。要撃戦闘機部

隊リーダー、エースパイロット。

ジェシカ・ローランド 工学博士。「軌道

屋」と呼ばれる科学士官。

ケン・ジンナイ 戦争終結へ向けて奔走する

地球連合議会上院議員。

デビッド・オオタ ジンナイの腹心。

ユカワ・ナオト 日本国の野党指導者。

シマダ・ユキオ ユカワの側近。

コニー・チャン 反戦派のジャーナリスト。

ウィリアム・コールマン 反戦派の海軍提督。

ハリー&ボブ 地球連合保安局（UNBI）

捜査官。

ジョン・スミス&ファーマー 少佐。海軍情

報部特別調査班所属。

エドガー・ホーリーランド 中将。海軍情報

部のESP研究責任者。

オレグ・チェレンコ 地球圏に潜入している

ヤマタイ国の高官。本名はタカメヒコ。

ヒミカ 木星圏の指導者。

第六章 木星圈遠征

1

ノブゴロド空軍基地

「やっぱり、俺が言ったとおり、俺たちはノブゴロドに帰ってこれたじゃないか」
ひげ面のアレキサンドル空軍中尉が言った。それを聞いて、思慮深いユーリ中尉がかすかに顔をしかめるのを、オージェ・ナザーロフ大尉は笑みを浮かべて眺めていた。

一般に空間エアフォースと呼ばれている地球連合軍の宇宙空軍に所属しているナザーロフ要撃部隊の隊員たちは、くつろいでいた。

たしかに、思いのほか空軍基地のあるノブゴロドでの滞在が長くなっていた。ノブゴロドは居心地がいい。回転による人工重力が一Gに保たれているので、月面よりもむしろ居住性がいいくらいだ。

なにより、ノブゴロドの風景は、スターリン様式の尖塔せんとうのある建物やロマノフ王朝様式の寺院などがあり、白樺やポプラの森林が心を和ませる。

空間エアフォースは、地球時代のロシア軍の影響を色濃く残しており、隊員も圧倒的にロシア系が多いからだ。

ノブゴロドは、月と地球のラグランジュ点の一つ、L5にあるコロニー群の中の一つだ。

L5は月の公転軌道上にあり、地球から見ても月とちょうど六十度の角度にある。つまり、月や地球と正三角形を成す位置にあるのだが、月の公転軌道上にあるため、地球と月の間よりもずっと簡単に行き来ができる。地球の重力を振り切る必要がないからだ。

だから、月の軌道は空間エアフォースの縄張りだった。

生粋きっすいのロシア人であるアレキサンドルなどは、ノブゴロドの滞在を心から喜んでいて、ユーリはそうではないようだった。

ユーリは、気づいているのだと、オージェは思った。

木星圏のテロリストたちが月の南極にあるエイトケン天文台を占拠しようとした。強襲母艦アトランティスは、その作戦を阻止することができた。

いや、正確にいうとアトランティス所属のギガースが、月の周回軌道上からランディングを強行し、敵を制圧したのだ。オージェも成り行き上、それに付き合うことに

なつた。

帰投命令が出ていたにもかかわらず、危険な月面着陸を強行したのだ。当然、ギガースのドライバー、リーナ・ショーン・ミズキ少尉とオージェは、ノブゴロドに着くまで、自室での謹慎を命じられた。

命令違反だというのに、おそろしく寛大な措置だった。エイトケン天文台を守ったという功績のおかげであることは間違いないかった。

「月面の上陸戦」に先立つ「火星上空の戦い」では、火星の衛星軌道上にある施設の生命線ともいえるマスドライバーを破壊された。

これは甚大な被害だった。その上、エイトケン天文台を占拠されたら、物量・兵員数ともに圧倒的優位に立っている地球連合軍といえども、安穩あんのんとはしていられなかったかもしれない。

ジュピタリアンがエイトケン天文台を狙った目的は明らかだ。エイトケン天文台は電波天文台だ。

クレーターの湾曲面を利用して、そこにパラボラアンテナを並べている。クレーター自体を巨大な一つのパラボラアンテナに仕立てているわけだ。

電波天文台は、宇宙からのありとあらゆる波長の電磁波を受信する。そこを占拠す

れば木星圏から直接発信された電波を受信し、それをさらに月自治区、火星自治区、そして地球に流すことができる。

ジュピタリアンの情宣活動に使えるわけだ。敵の放送施設を押さえるというのは、都市侵攻作戦やクーデターじょうとうの常套手段だ。

いや、エイトケン天文台を死守できたものの、すでに地球連合軍は尻に火がついているのかもしれないと、オージェは考えていた。

ノブゴロドの滞在が長くなった理由はそこにあるような気がする。つまり、軍の上層部は、大きな作戦を計画しており、その準備に時間がかかっているのだ。

ユーリはそれに気づいているというわけだ。いや、ユーリだけではない。他の隊員も気づいている。アレキサンドルだって気づいているに違いない。

アレキサンドルは、不安など決して表に出さない男だ。だから、わざと脳天気なことを言ってみたりするのだ。

これまでにないほどの大きな作戦になるかもしれない。オージェはそんな気がしていた。そして、もしそうなら、またアトランティスが中心となって戦うことになるだろう。

現在、アトランティスには最新鋭の兵器が集められ、艦載機の代わりにオージェの

要撃部隊が配備されている。つまり、連合軍最強の艦なのだ。

その戦力は、同じニューヨーク級の戦艦の中でも突出している。

軍人なのだから、戦うことに異存はない。作戦を与えられたら、全力で遂行するだけだ。だが、オージェはジュピタリアンたちとの戦いに、つい違和感を抱いてしまうのだった。

その違和感の正体は正確にはわからない。

疑問に思うことはいくらでもある。

なぜ、アトランティスだけに特別な戦力が与えられるのか。

その象徴は、ギガースという海兵隊の新型ヒュームスだ。完全なプロトタイプで、見るだけで莫大な費用を注ぎ込んで作られた機体であることがわかる。ヒュームス(HuWMS)は、Human-style Working Machine Standardの略称だった。作業用強化スーツの規格を指す言葉だったが、軍事転用されて以来、人間が乗って操縦する人型兵器を指す言葉になっていった。

ギガースで得られたデータをもとに、主力ヒュームスだったクロノスが改良され、新たにクロノス改が海兵隊に配備されたが、いかにもとってつけた措置のような印象がある。

今後ギガースが量産されることなどないだろう。そんな機体がなぜ作られたのだろう。オージェは不思議に思う。

さらに、そのおそろしく高価な新鋭機を操縦しているのは、まだ二十歳にもならないリーナ・ショーン・ミズキ少尉だ。

その点も疑問の一つだ。

新鋭機ならば、小隊長のカーター大尉が乗るべきだ。だが、カーターは、クロノス改に乗っている。

そして、エイトケン天文台での戦いで、捕虜となった敵がミズキ少尉を見て、「ヒミカ」と呼んでいた。

ヒミカとは、木星圏の宗教的指導者であり、政治と軍事の実権を握っている人物の名だ。

これはどういうことなのだろう。

たしかに、ミズキ少尉は普通ではない。「火星上空の戦い」では、不思議な行動を取った。軌道上でぴたりと動きを止めたのだ。

敵の恰好の餌食になる行為だ。だが、実際にはそうはならなかった。それまで一糸乱れぬ行動を取っていた敵戦闘機のトリフネの動きが急にぎこちなくなっただ。